



未来へつなぐ

Vol.

180



文／本間 吾里砂

近年の大規模輸送障害を教訓に冬の安定輸送を確保するための改善策を実施
二〇二四年度は札幌圏に全長約二五キロメートルの大型除雪機械ENR1000を導入

今年度も除雪機械を増強 計画運休・予防除雪も徹底

昨年十二月に気象庁から発表された今後の天候の見通しでは、北海道の日本海側は降雪量が平年並みか多くなる

ことが予測されています。二〇二三年二月の記録的な大雪を思い出し、警戒感を持つ人も多いかもしれません。JR北海道ではそのときに発生した大規模輸送障害を教訓に、同年冬期から改善策に取り



大型除雪機械 ENR-1000

組み、毎年着実に実行しています。中でも計画的に進めてきた設備投資のハード対策については、二〇二四年度ですべて完了しました。

まず除雪機械の増強では、二〇二三年度と同じく札幌圏に排雪モーターカーロータリーを五台導入。恵庭市の島松駅に札幌圏で初めて全長約二五メートルの大型除雪機械ENR1000を導入しました。そのほか、白石、手稲、小樽、追分の四駅にも強馬力化した除雪機械を導入しました。

また、各駅に設置している降雪カメラで駅構内状況を把握し、急速に積雪が増加しても列車の運行が継続できるように、除雪や運行の計画策定に活用しています。冬の安全・安定輸送に欠かせない除雪作業については、札幌圏の列車をあらかじめ計画的に運休する取り組みを前年同様に実施

し、作業時間を確保します。実施日は二〇二五年二月四日・十一日・十八日・二十五日、二月一日・八日・十五日・二十二日（いずれも土曜日）の計八日。運休列車は夜間の千歳線二本、学園都市線二本の普通列車計三本で、全区間運休とします。

ハード・ソフト両面から 継続的に冬期対策を実施

二〇二三年度から始めた取り組みも、結果を踏まえたうえで継続します。その二つが視界不良をいち早く把握するための「視程計」の活用です。前年度に続き今年度も視界観測を試行し、効果検証のうえ有効性を確認します。また、二〇二三年度に函館線の朝里～銭函間で日本海からの高波が架線等にかかり、その海水が凍結したことなどにより、列車が長時間運行不能となり

ました。この事象を受け、悪天候および夜間でも確認可能なカメラを増設しましたが、今年度は現地の状況をより詳細に把握できるよう高性能カメラを導入しました。高波の対策については、二〇二五年度に小樽築港～朝里間に既設護岸への波返し工（約八〇メートル）の試験施工を行い、効果の有無を検証する計画です。

そのほか、線路上に積もった雪を除去するために、全道各地にラッセル車十三両と除雪機械三五台を配備。ポイントや駅のホーム、屋根上など機械除雪が困難な場所も多いため、全道各地の駅構内では、一日あたり二〇〇人体制で昼夜を問わず除雪係員による除排雪作業を行います。

このようにさまざまな取り組みを行い、お客様に安心してご利用いただける輸送サービスの提供をめざしています。①